



喫茶南方録

五

卷ノ五



喫茶南坊録 五



本来白雨路地之号

雨露地を草庵寂寞の境を^表振ふる名あり法華譬
諭品小長者の法子三界に決定をせしめ地を
ふと況き又雨露地を白きと云い白家地とも云い
清淨地無一物底といふしえなりを名あり地を
しと云ふ一かゝる外面仰ふといつれ寺院
雨露地と号ありと茶入の一境と名付しれ利休居

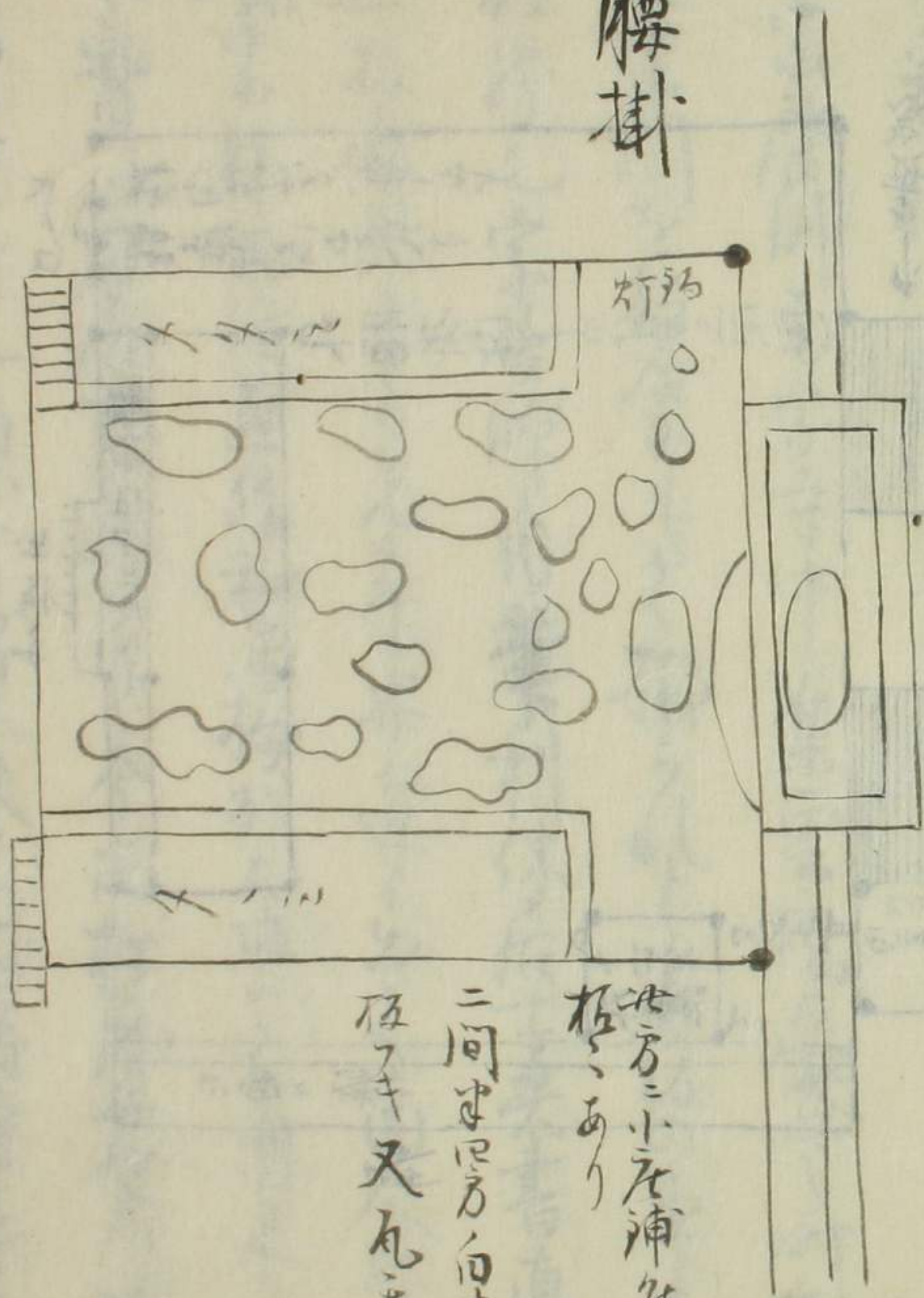
士世間より唐土垢染を離れ清淨の心表
くふと云えとす所のかの書院墨子結構の
式より曲人を包み——あ地——一境と関中一室と
系属を点茶——世間より唐境と——導くと
ありあ地清淨にわ相を樹て天然に一境あり
体は欲ふ

あ地とは浮世への道をもふ人へ唐土を留めし
腰掛附堂腰掛中へ入

休居士時代を何方にも重なる地より往還れ道路を
直なる地へ大戸を開き内へ入り大戸の隙に腰掛
あり板敷なる簀子守に唐土相成に仕えり西
地草庵よりあれ候の茶湯をわハ漢土中をとり
入あ——うひま——り且後古田織姫と小堀遠別
杯をうけ世のなふふりれり大なるき乃——り
忽——あ端自中能格ふ堂腰掛をま——衣が衣
等も衣か——しまゆへ衣裳堂——りあ来ふ

堂腰掛まゝくま白中ふと入すれやふぬ又を
 内小堀をわけ中々りをかまへ中々り此内ふ又腰
 かけを居ち初入をま中々りまゝくまひつるぬ
 金席併中さ此時堂入りりかちまゝくゆうすふ
 中々りり内ふかゝり腰かけり病々堂内
 入花をまひりり

堂腰掛

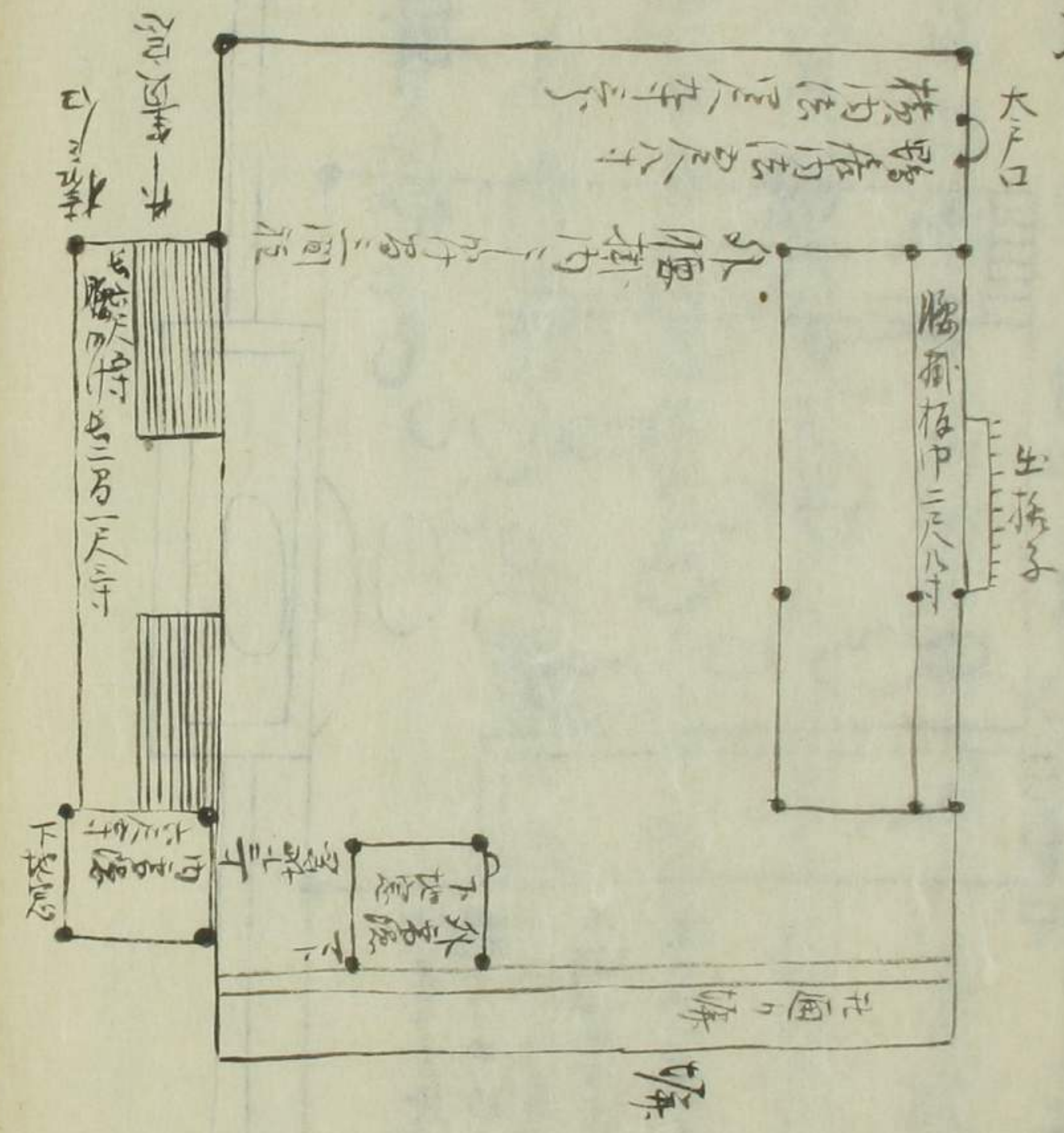


此方ニ小座浦付タレモ
板あり

二間建四方白木角柱
板又丸モアリ

外腰掛

當りて
外三三
中柄
同前之



看板

南坊宗啓師南宗寺中集雲庵に茶ふみ松下堂
建置茶門を納合中一掛り看板の事南宗派
中宗師之宗啓師自筆利休居士書直判
看板一枚表裏一々先年果てなく商人に有
しを宗後前便直外和向掛別大坂に雪見し
寫し寶山右居士に送りし今尚松月庵に
此物並落れ豊高米の得く今所持有云々看板

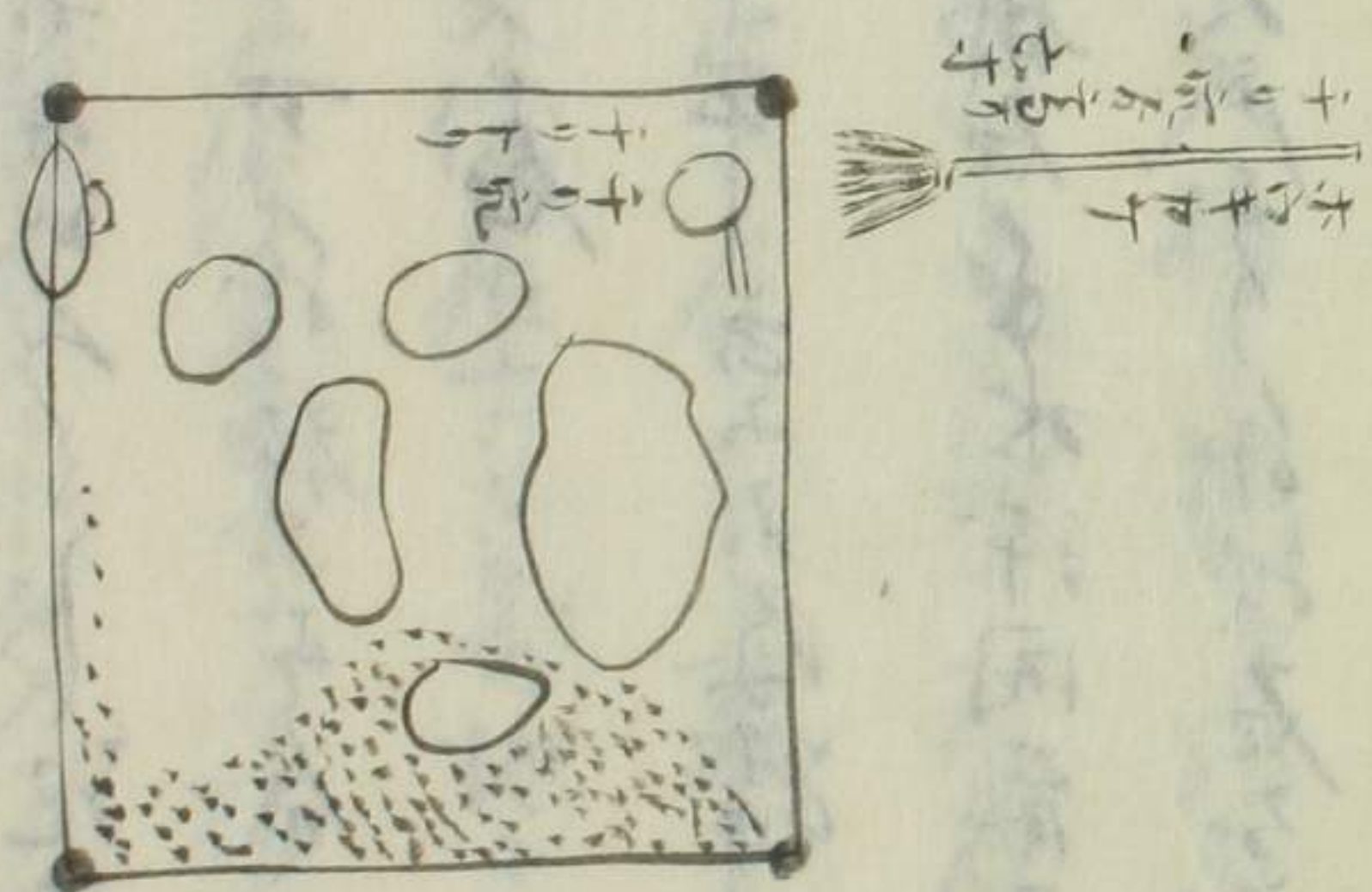
書面一流れ筆を字しく各所持しく有故実不記
腰掛かゝる家看極ふ親すうしく同道人相掛り版
と打合——定くも寸法をふ——寺院も右も同一南
坊を築まゝ庵中へ有念版をかゝる所と——事勿論
うり或を折を用或を換置等をしむけふ但せの用
へ此書はれしやうくむういふ事ありと

曹溪

あぢき院も禅林の法親一矢の法式はまゝかや

惣々茶堂腰掛位一篇やう古板を竹等を用ゑ候ふ
道具とていふくも新しく法障ふれを用ゑ事肝要
今其時客も候は内とてな半禅林の候所は設を
淨頭——くまに——は道人和尚達にせぬとて
例多し——條行のふ持候事人客も其心得あり又とい
亭もも客候を格別ゆ段の人を用ゑ故のうり人入しを
其為りといふ又利休の法をこれ世に仕人の者も候
ふかくまゝといふとが——も半し有り候和具類有之

客内末彦小野南師隠者等かよりくそ附文心を傳へ
上客よりさま、小野隠ふ字を付し事一肝要之嘆會
原云附文の事、地書隱者林の法親を以て此事と云
ふ、かゝる此れ各別あり、多桶面と云ふ據磨を帝
ふと云ふ此事ともあり、ちりちりをちり穴ふは付杯す
れやうふかゝるを名あり、わけの折檻、秘事、口傳
の不用を弁す、此爲者、よくよくして、此、高隠あり、此へ
一、高隠、此、内乃、大概、た、此、記入



木之栽植

市中に宅邊ふもと山出谷をうけし木々を

木乃栢松とて多く配り有るなり深山に松ありは
谷の奥実落く松多し松右ふをまゝ松多し具んを
以て栽るとなり木ありて一し此木栢松をいふ
く木深き樹竹とも不可分なり

飛石所^り名^なある石

あぢも病をそゆれし事—云ふ不及隣より此にわはたり
石をとりしめ石と云ふ脚石も水沖同前石相も石額見
石ふとさぬく—何り大戸より仰れ石を一つと云はてぬく

雪踏をたづねかへて海に入りたり物言ふに石ある處踏めし時
 のまじう又き障ふてもとゆめれ石のふくき雪踏ふ
 とあしづみ入り雪踏をたづねかへて裏と表と合腰掛り
 あり臥坐しくし——お又休居士とあはれ石ふりし右の
 時を玄關のゆふむき竹簀子ても板をたづねて小丸を
 けりたづねても雪踏ふてもぬかしく小丸のふくきまじうなり
 しくも雪ふくき明く入らん世時を分端人つても極ふる
 為之中三座の人を金りしくし海をわかれ是はたなくやう

かゝる能く体の事を思はせんとせしむるや
此相違なり當國杯砂地なり——石をきり置るや
首を振るべきの程に思ふと思ふ——と云ふ——

よの汗降る下れ半

后所石定之休居士大かゝる地内を居るやう——と
かや腰のけしきなり——と云ふや常及他之玄關をさし
下りも思ふなり水汗を流し——したる事減るや用木
多く——と云ふ桶で水を汲むと云ふ程と云ふ事

蓋ふ不々吹會夜多雨思ふに杯の時を思ふすへ——曉夜
今杯を只今故一水なれと思ふとも入る木の葉なり
ふと——と云ふなりあり休居士時代より水汗を流し
はたし——と云ふなりあり

志士も湯時古風江府御城御移る金山の露
地内を流し——と云ふなりあり

家光公御時代小遠より思ふなり——と云ふなりあり
何れ所より——と云ふ杯を流し——と云ふなりあり

師は水鉢なりをきく居りて金瓶より
上段より具故を師守あり小を師守右田儀時
を

家康の師を世しく師府の師を世しく師
師府有り一故師水鉢より居り一今ありて師
一川より一光る川へはくして水は故より居
り一師守ありて師守あり一とや師守時節
も師守ありて師守あり

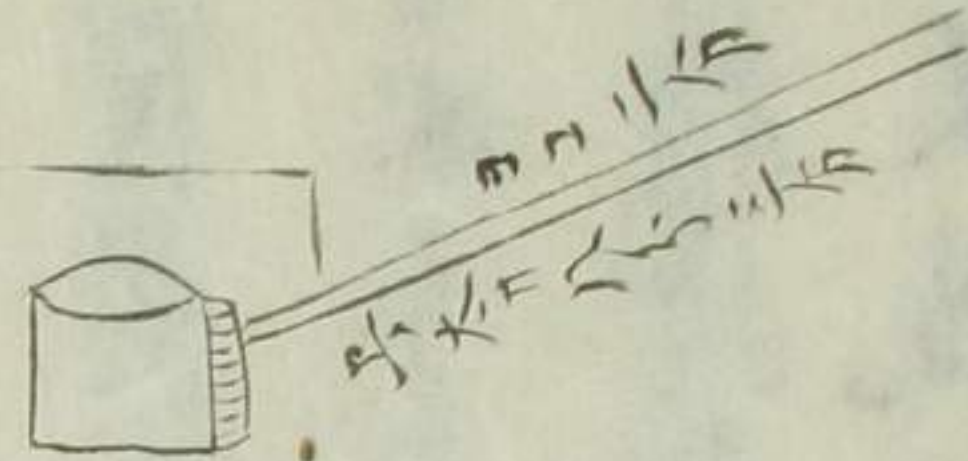
此は師府石燈の師府守ありて師府守あり

師府守ありて師府守ありて師府守あり
師府守ありて師府守ありて師府守あり
師府守ありて師府守ありて師府守あり

一師府守ありて師府守あり

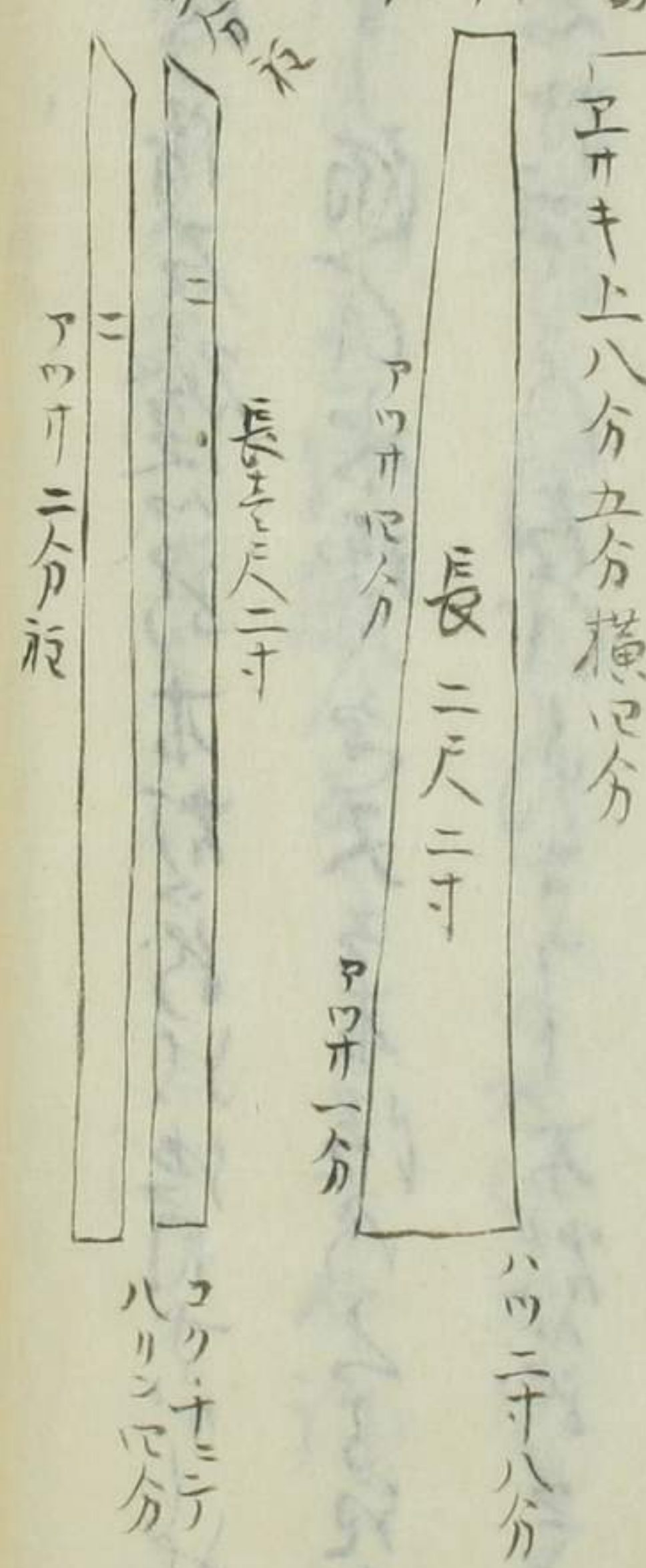
師府守ありて師府守ありて師府守あり
師府守ありて師府守ありて師府守あり
師府守ありて師府守ありて師府守あり

柄長一尺八寸五分 廣二寸五分 外縁
 二寸五分 板厚二寸五分

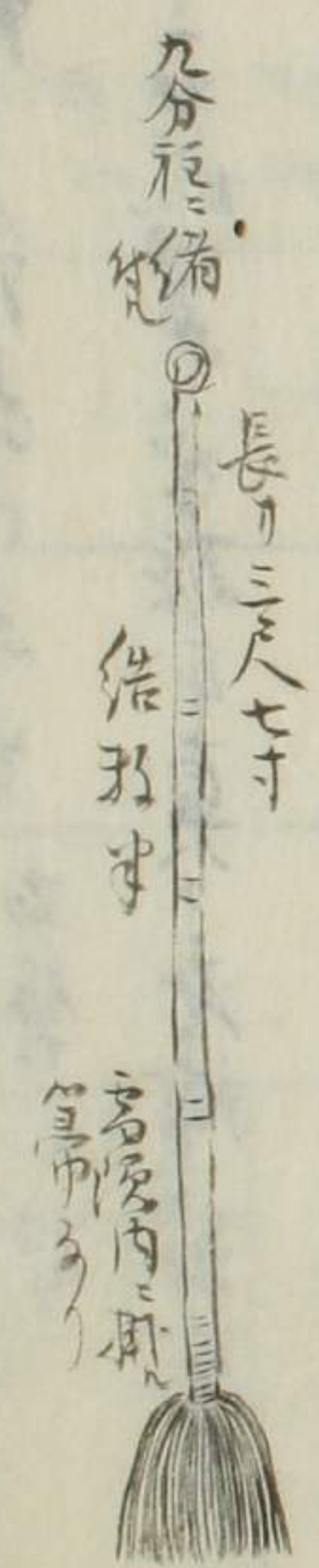


上ツキツヨリ六分

觸枝金時子
 高隠山分り
 かしき砂れ上り
 觸枝を立ちり
 穴小時子を
 立ちり



一、簾を捲き入むらひ小ねるゝい簾巾ひてもまゝ
 俣ゝちきしれ簾巾ても勝りひ出さ定ゝる寸
 か一雪隠り内ちり穴れう一ふかゝる簾巾をまゝい
 簾巾をゆめの簾巾ふとゝり



草庵之部

珠光真在補

紹興四年

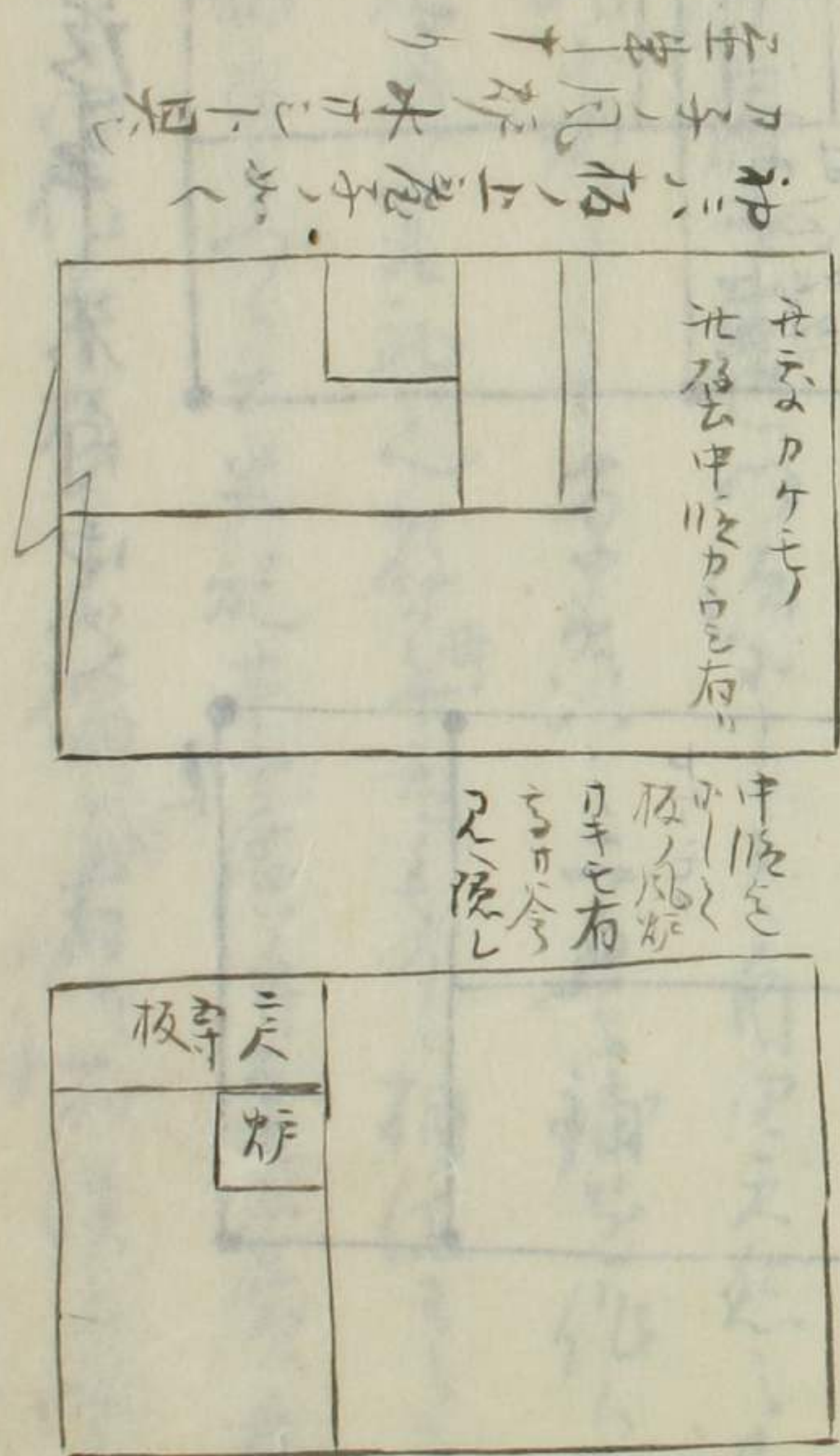
木椅子竹椅子張所
ち張 所

珠光曰此中少し置ても根本真ノ在補ト云ふ子紙白張
所板板此ゆゝかー天井小板背實所此り一間床の枕の
圓悟禪師ノ墨跡を掛目屋子をかとり並く後張を切
り墨を金合所れしとや又床の二幅對其掛後
勿漏一幅の縁杯もかけしとちろりあを卓小香
煙花入し或は二重ふな方を置後し事人

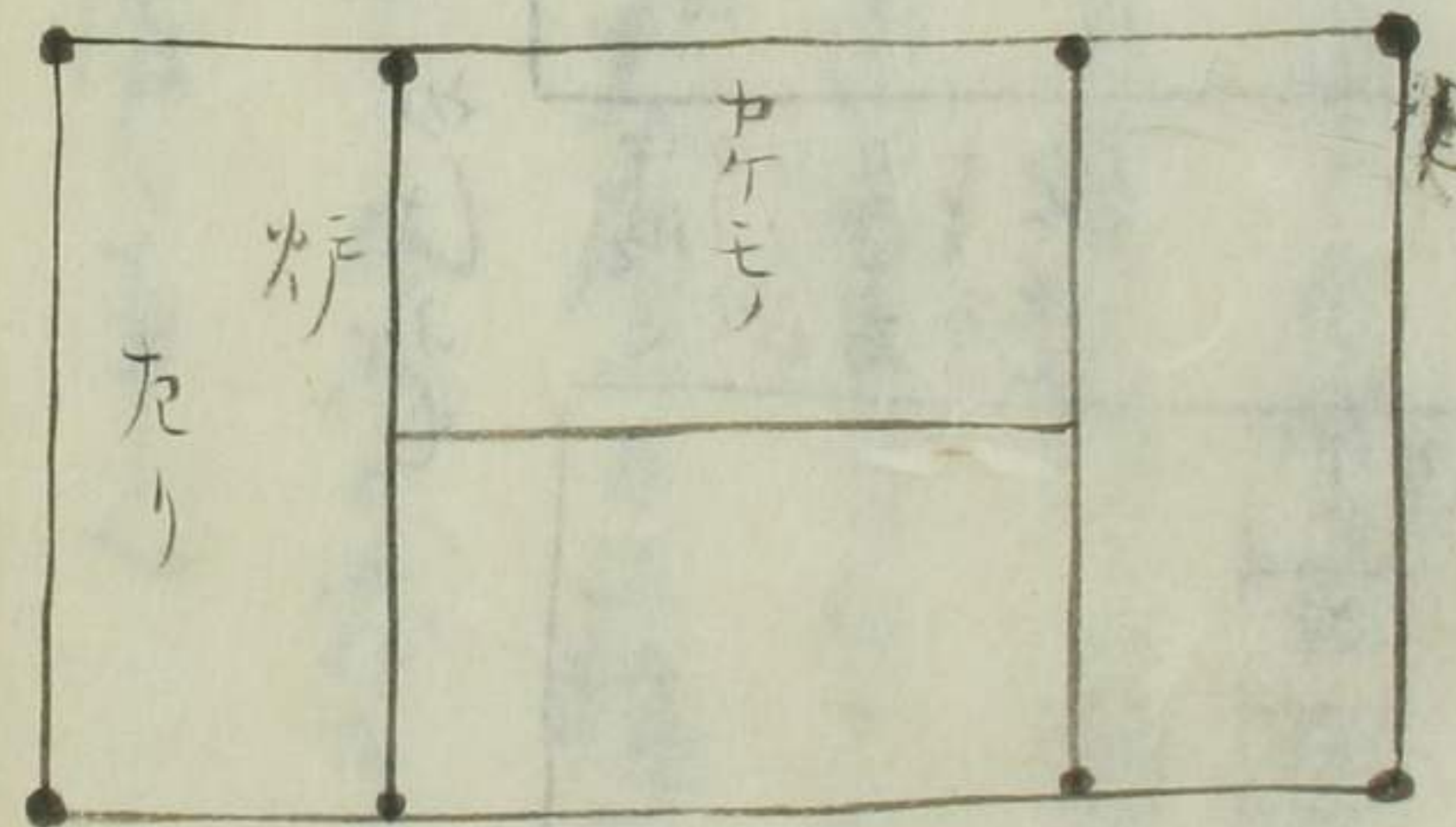
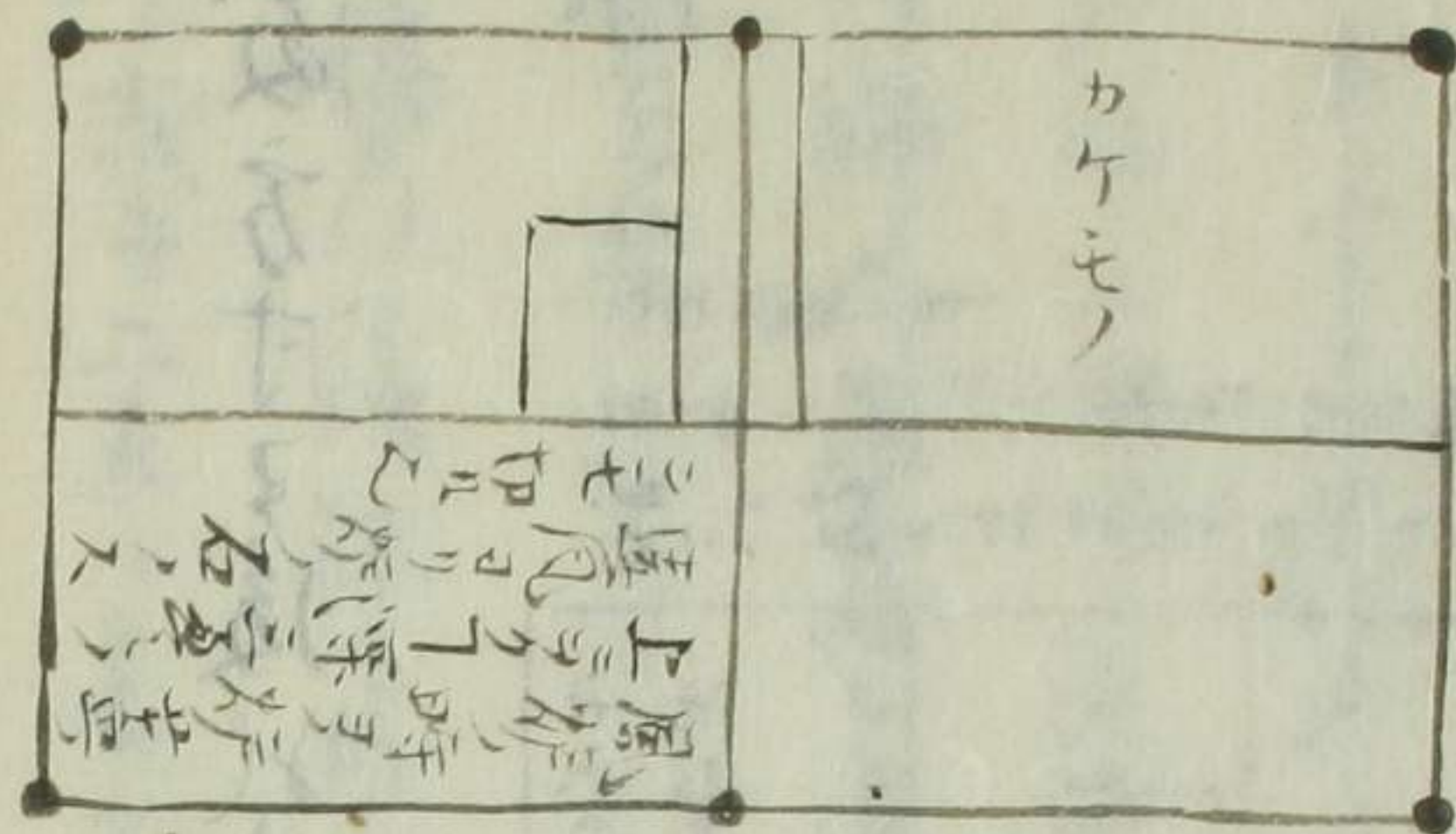
二重ふな方寸置後し事人

後めば小も

本張



長四角を你三邊を後のあしうの之を記不是をすこれ
田の類ふく流車一不自中



草庵教の座

釋氏要覽に曰草を以て座を掩ふこれを座と云
とあり草庵を世の法より自由天然の勢を
や休居士の語に決して方外に二あるを神を化して是
を地草の居り室初におきて坐を以て相伝ふるに
形なく不偶なるつて云史記本が座傳を本座座光の
をを腹度より此事ね不偶と有りお漢を本座座
傳よりより同くおより師をに今更不偶合

云々風牧之文を後を寄しと云ふれ華湯と柳體より
おまへに好ましくいふくよく思ふ云々泥より數言を
おまへに好ましくいふく思ふ云々泥より數言を
おまへに好ましくいふく思ふ云々泥より數言を
おまへに好ましくいふく思ふ云々泥より數言を

田

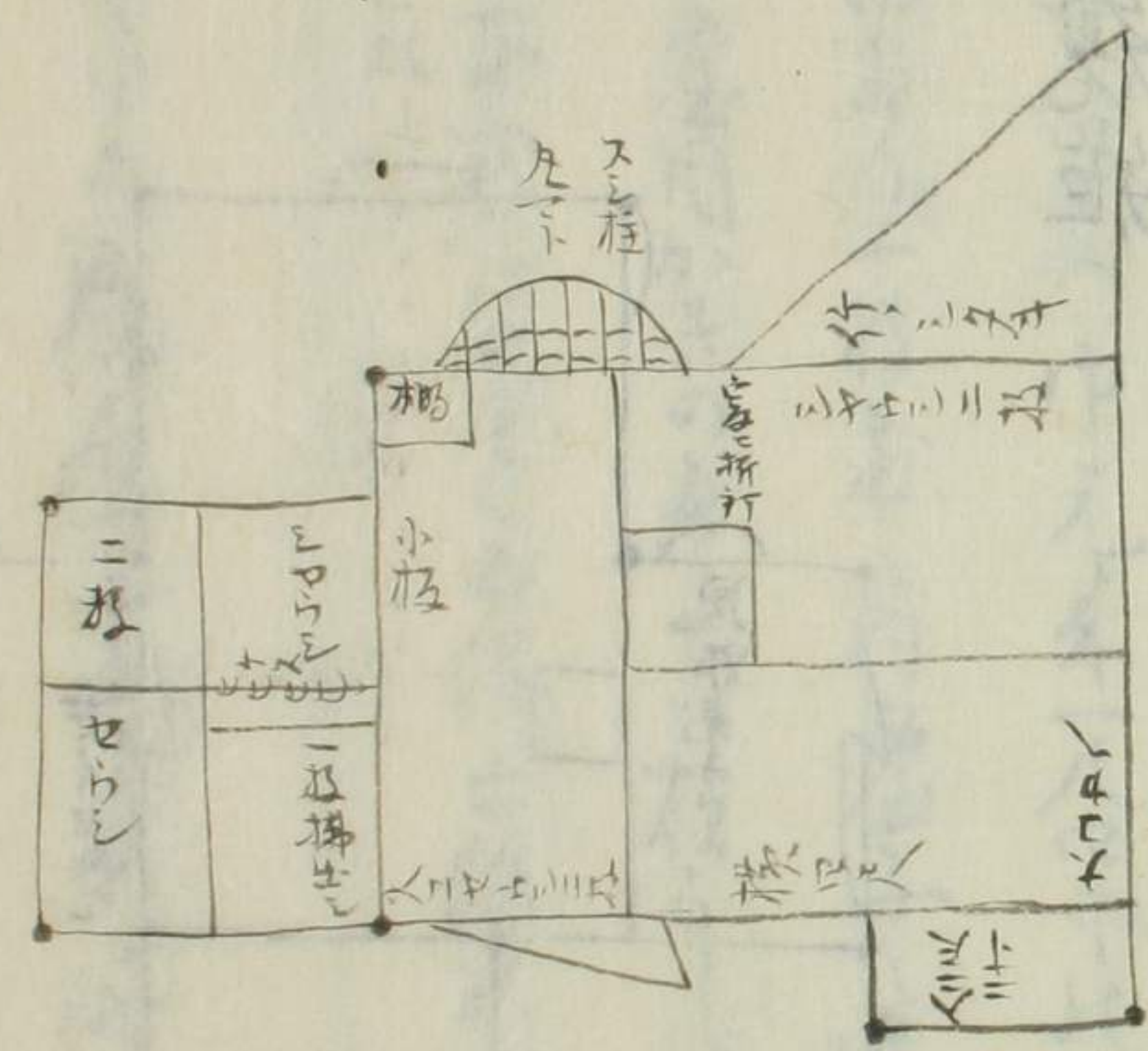
吾を浦の謂^隅を屏風と云ふく云々おまへに
茶を云々とあり茶未だ流行せられぬ事と云り
一説に山がを圍む處を以て圍ト云圍取處ト云

少くも是れ同じと云ふ世にたゞ有し之今時別
小茶房杯と云ふに在るに後人を可き之なり

詔語利休ニ云浦所が之定法

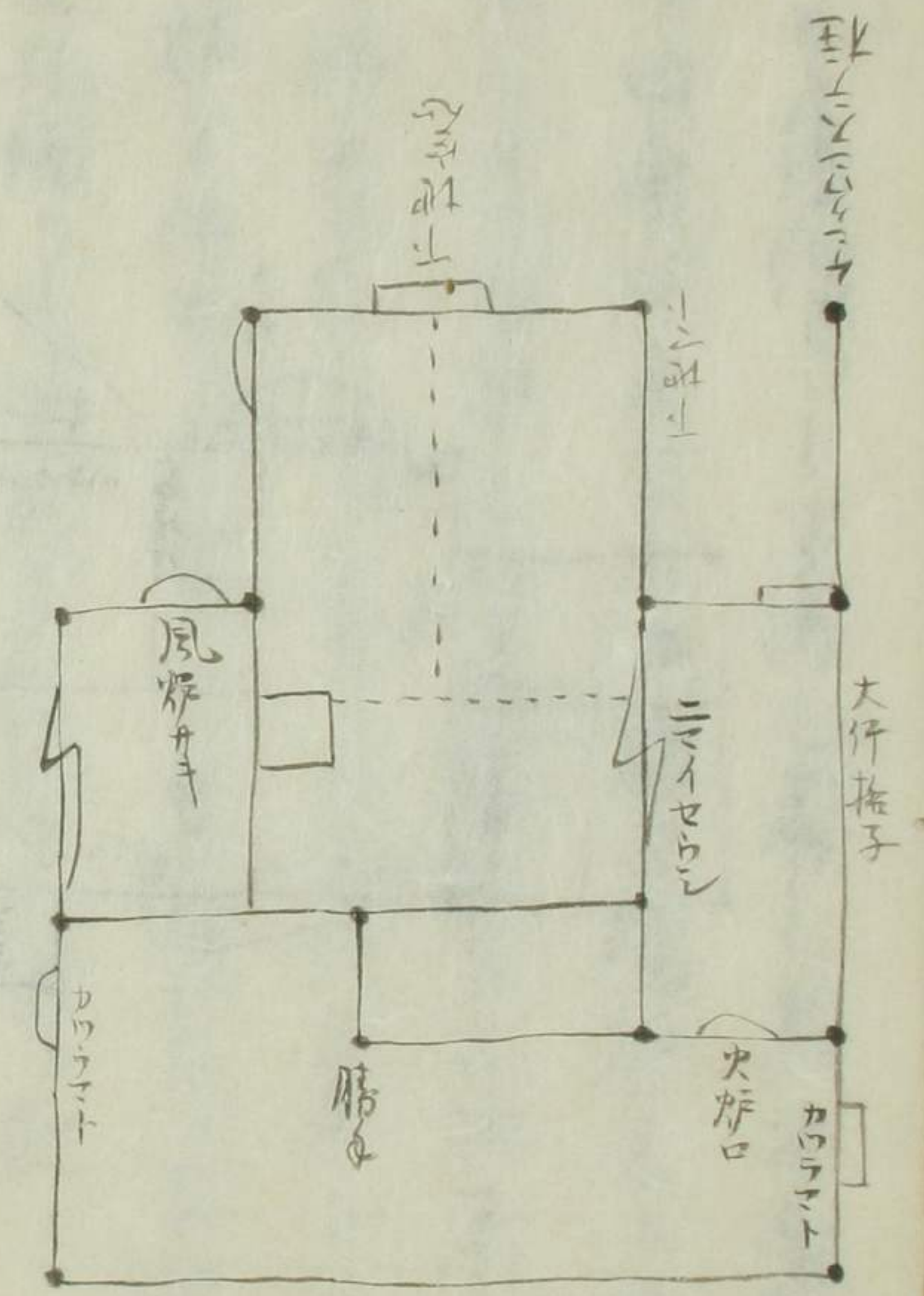
五居士相決しと云ふを佐す詔に山里休の如
喜流中と旦外おまへに地は茶に元初なる席乃
はまゝぬきと云進二あるまゝ成る年と月とあるは事
なり定寸右の記入詔休相決しと云ふ隅切と白が
茶房才と人得介と巻子能く在る人等を云ふ

う川一を後傳し寸法を事くある白那める
 白那のり田舎間をある小庵子風那をりの寸と智
 命一平とある白那め又服那ふも切床に付根定
 の配りまゝ物形をあらわし集をあらわしとある宗啓師
 此位庵之郡と持せし切りし主勝より方向すつ
 りき自在にわたりとある此位庵之郡に記入
 二五とある又ある中よりあるを同を記しとある庵月の書
 記入具外からある大勝よりある



畳同規矩

中程の右は群を直し、を畳同切りト云ふ人こそある



内は巻子の中一尺半と目書きされり屏風の厚さより寸
 かき退く利其一人守るの中元来一尺半すれ風炉を客室より
 せしく群を切り一尺ある内巻子を畳同切退きより入
 り畳同切りとある巻子かきのあると云ねるしれ巻子切も有り自
 中程の右有り本式之何れにも陽に張れかゝる用や和事多
 しに傳有し
 隣より二三四ある中より体居士二五ある所は他へ踏ぬれば家
 又き竹簀子より小丸と他は半中あり

皇子は板四本を二つし二寸は餘し板を立後ぬる板の
も二寸の香る木のゆき板を立られしと作り板を
金宗をまき竹板板折に改めしと云く香る木
野く木同前と思分を分る類と

まきしてある山甲思本とほりる香る板と

あうぬり

右京良帝御部

茅茨きす板檀けきすすとか金次の新ともき
すき板をたて民くくしけき佛んと安し板い

く板いもありすと稱しあふ神ありききあり

集雨宮板

小棚ありきり棚もあり板ありは為目ふつるきき
は二つあり九寸八分ありと一はみと板本もつ板と一
二分あり八寸九寸あり八寸八分あり板に傳き板
うきき一系小陽あり

中棚あり人三寸き幅あり人ありききうきりか福を通
く同陽二つと右板中棚と小板ありき為目あり

合心集

大僧正意

はちろふ定ぬす店まゝも 秋の夜の月

金庫掛る川一巻わろ

初を金庫を掛る後中より川一掃云まふ不及腰掛を
るゆゑ所よりまゝ一自然小巻を添す一息あり巻
わろ一を打たおやうふかきなるを志金うり
掛物然打き天井より通り縁より一寸金と打打之也
を并竹打へかゝる一文字ふ一と三方を割ぬる

角削りも何と波目うふ打と一打は折板に
三ッ針^江三ッ針の太横物に打といふ中ち波目を上た
右を皮をさす打と云一打幅もの打は目をし
おとろはありうけ緒をうゑためありは目
と三ッ針とく打と一
花入掛物打地お花より三人より又二三寸より床に
打を床におく事人様江一打板薄一ッものを
掛物かけ針お花かけ打さるゝ板料よりすへ



汀太刀大概
九寸五寸

床れち中打つ床——くけ小打とち小をふ花じ
は、はくちかかへう、次床縁れ上當くは、物
ふもあり休時代も初初金、酒床を、床——御内
方小打と云い、宗意を休と、同前、板床——を
つ、舟、舟用

袋板——打中、板の横、不、此上、一、物、茶入、代、板、板

三分一、見、ゆ、か、やう、小、打、金——其、際、は、袋、高、下、の、ら、か、ま、い
板——休、室、を、竹、打、も、用、ふ、古、儀、を、後、打、と
燈、掛、と、打、と、下、等、席、あ、あ、金——床、登、同、様、に、な、り
料、算、す、へ——は、ち、分、と——但、し、床、あ、あ、を、板、と、し、
ま、も、あ、あ、金——は、ち、分、と、は、ち、分、と、は、ち、分、と、
柄、抄、と、打、と、小、打、金、を、一、金、と、は、ち、分、と、
九、寸、五、寸、と、は、ち、分、と——角、削、り、と、竹、は、ち、分、と、
く、刀、掛、打、休、板、士、代、を、礼、世、と、御、内、客、も、用、ふ、金、湯、と

至らば一かゝり小の茶御もいふ事あり二股の柳を
中々さしき代流の一級を扱ふ人入る人守りく
板をさうかひふくもあを茶番をも九くして常入
と、茶をかくれ上は小襖をさく茶具と入る又下は
小柳一を扱ふく一板のうへ小水指をさく勝もめ
ふくふくさう客席は茶所ふくさふく

隠縁所 木地 唐塗

考くみ杯く一柳く何くふく空ふれて是

く一後流も云ふさぬ隠縁所を木地を流あれと
佐木地流相違くさくさく流うても唐ぬり又さ真
唐塗くは真くさぬさぬさう
額系唐く破凡又さ玄關底くも柳く唐は唐外
あてもんおひさうり唐唐く額入所さうさ
くさぬさう

屏風勝くはあかき体く細代屏凡木地くさ
多れあてりく一唐唐勝くさくさくさく

堂上方に細代屏風をぬき書小く繕掛之

文會之部 茶會案内 之度附れ之

之客ありし自他行く所——亦書通より入る色
之ありし暇あるといふ所ありしと随いある所ありし
か——介限短疎ふくくとも云ふ不及後日之れもこれ
准入之客をれしとも懸ある——中半之草庵會貴
客と云ふも然ある——中入く人として客と云ふ
ころ下か不掛世弟を前文のあり

茶會案内 茶會案内

口切りある草庵——之意に連子竹障子——明て
竹障子より升——等々竹障子改めてよ——然るさい
右又ぬき改むる事——ある所——いひく連子竹障
子角ふく改むるも一凡ありて面白く——柳子竹障
ありたし——茶會案内 茶會案内 改枝折
戸を括り改め事——まふ用心あり有る所——年々
ある所 地を掃除するにやとく——若果ふり早くある

うはふより所習い事もあり
家地大戸代半も入宿明く金へ——大戸外石の
うへへ雪踏むも不ふと西路地に入ありとさうとさ
踏むとく半——佐助い定の草本いあふかたといふ
を往來する故めは只青岡をとり切老石切者が——
——いふねふ又と——足すふやういふくお金かり
せんふふをう——と云休とく時ぬふく草履の裏り
皮を當く切し市町ふくはく——せまふ地も用らる

仕事を休く宗啓師匠あり——休の云下駄をたく半
今文のしりふはあふねた鶴の春も休といふ三人ふ
下駄をたく下駄をたくし得——ものふ——と鶴云れしう
京課な良お十人におまの者めれし下駄をたく
切者僧といふ人らうてさか——これいつも指とれる
事いふれい金得——これさふふ事いふ得さ
此先い曹法とさひくはれり——京坊別が——
ま——の物おまふと宗啓師匠流りて笑りしうと

亦石と云ふは故草履のうへに付くしき端と云ふ
く川の青いからくすの福は各人遣ひたてをすま
流るゝ板を介しと有りたる物をさのむといふ
と相成るゝへー又唐く川の青も面白
腰掛の至法具 看板 版 但 鳴鐘とて折るも
各在 但 客持のり 硯 文庫 當日客名所
たをいふ
書内記と云ふは先腰にけは法具右と云ふ 客望

と云ふは書所より云ふ 腰にけ二つあは上を下と云
くを命し 但 相に内筆二本小刀書けホ入を命し出
院方より云ふ 一 杯も入るゝれと 腰掛に便衣を用
へ 後もしと云ふ 墨をけと云ふ 一 杯も入るゝハ帽子と
かけ入るゝと云ふ 一 杯も入るゝハ 秘事 又 席 内をさ
る 足 席 一 帖 籠入 一 出 席 ありと思ふ客 一 客 一 客
たをいふ 一 休 時代と云ふ 梯 四 同 一 一 手 持 け 目 大 方
一 一 八 九 十 年 世 人 入 へ 用 利 休 多 なる 魚 仍 一

凍地氷打振

茶會の日旦別限と考へて、あ地内外腰掛ホ志、
氷打命——泥石のれ多きぬ振ふ命——物中
腰掛け石口掛——隣より石氷けく拂へ——氷
こ前石氷けぬ命——氷打時氷もあは他、
もうふ命——惣氷打振大凡はん得へかす茶湯の肝要
之、水ニ炭ニあへ大概と云ひぬあ地前一度中、
前一度舍併客立時、一度お合ニ度なり胡名候ニ

こ水惣意味御礼申之、冷水と云水、こ家々振を
心得——何れや客あつたりか、ふあ——ふ
ふれあつたり——休え主人、おまゐり遠之惣
——候、茶湯大概初振り、は也二時おる命、
然るを客、別限と考へて、こ水、旦上候、
平々振、——れや、ふ候、——
候、濃茶のこ、茶ま、は也又何事と、可致客、
長物、は、を、ふ、茶、を、是、候、時、ゆ、あ、地、成

改先疎略な記金ふも水研ふも水とあり草
木も水と打杯す句——客も其趣を考へてさしこ亭
とてお世にま——打送り暇を可くせよ云——

草菴角初を川用云々半

配合し数同な組組入半

半席并はたあふふの半

初を陰と心得句——花あけ物令も大相にとも
と意ふ半とあり客一を陰に休へともある其心

突上と初をふは——金金——めは大法ふれたる半
亦をいふり客は客ふとふいあるを茶人入る客有
火相と以て一と流半は湯と云ふなりあり世時とて
後半陰とありと云半——客大おとあふすべ
客はねたうと心得句——

床墨跡 席も金又風情なり 柳香を研半

右き後乃ねかると湯を用床と柳との数略半を
金ふふなり——むくふふくきもの

休之歎尔

床を床座席と床棚二調と二半一調
 世よりよく用ゐる。床棚を床座調、床中を婦人
 用、そのほかかまどへ向ひて坐する向ひは講義
 に障ふかともいへる。又往々、坐向へ

得相火者

寅午圓三度と庚申之炭大和事一之大概を唱ふ
起育より仲之より雄中改免下火と入一炭一之

物打しえ、行儀水と汲水盆を掛糸し、釜を洗ひ
 水とたぐ、炉にかきおこられ、毎焼、釜會法にて火相
 考へ、客をあけ入るゝ所、是處に火相と云、初めの火
 之處、火相が今一度定係し、朝會をあけ入るゝ火、能
 火之言、併く大相おとめくたぐ、火炭之至へ、お手
 火相と云、初めあり、火中、午時より、お改め、一炭す
 るへ、是則、易多く、客入るゝ火、之、面く火おと、は、初會
 し、火相の事、之、面、の、并、は、火中、改め、一炭する、是、夜

多天之湯相之字ともいふ心得する所といふ
の、所能く不簡すなり

松風香色湯相といふ一腋の香といふことと香
云へり胡名灰三度と大相大形といふ茶といふこと
すといれといふ灰といふこと對して三度といふこと
又、顔相といふ字といふことなり、灰といふ字といふこと
水といふ字といふこと可通といふ字といふこと、雨といふ字といふこと
雨露といふ字といふこと、名能くいふこと、杯といふ字といふこと

亭之将東也

肩衣 十德等 僧具 直緒 俣俗等

鼻紙 楊枝 収巾 縮巾 足袋

衣服改む事、不及月代行水等、勿漏、足麻、
産膝、改む事、及、足袋、是、佛、具、若、寒、衣、
す、鼻紙、収巾、楊枝、収巾、入へり、足袋、
を、白布、に、掛、之、袖、中、に、袖、入、へり、
之、れ、之、際、の、
を、ふ、き、ん、に、鼻紙、事、休、云、ハ、足袋、
入、

一楊枝根元文字4と云ふは楊枝を以て又或
時古鐵の底に文字を刻あり一折りと楊枝
をせし小帯のしるしに用いしと云ふ物初に炭
ころを楊枝を用ひ後を茶の時に紫おを用ひて
祖物ふくまが紙杯とぬぐひの類巾に用ひしと云ふ
時紫の紋と云ふは地に入りおを茶に用ひしと云ふ
これに傳ふるすことと云ふは放るたりあると
云ふは

亭子に遊ぶ法 帚巾中等に用
楊枝 楊枝 楊枝 楊枝 楊枝 楊枝
一これに用ひしと云ふ

賓客の腰掛の来り看極れ有まうせ版を打く
案内あるはなると帚巾を折るくむのふと云ふ一校
折戸楊枝を折るくむと云ふ一これに楊巾を以て楊枝
杯掃ひ帚巾と云ふと云ふは同じしと云ふと云ふ
命一中々りも同前と云ふは左に楊巾と云ふと云ふ

掃く——一れく事ハ大切く申休る事訪かすくさ
打むのくま客あふひお討し時を白ふた人きあひ次
能れられ能く寂しく候お相のそれく人同く交
合ふま之内心と創すとも慢慥然とすといふ
初く一れお於く人初とすす事海に勝く

水新水改む事

小口桶井水泊岸に他用桶おくを桶も水新自他
く桶おくくび入る事くれ大切く事くあはれ

まの初のお他く水を運い客も初の所他く来つふ
ちれあは草岸も根えく改新改むの同く
人あふ世の唐より様子を控くるものも来る初
申ふを具言といふは次若くあはは後次を待すや
とまふれ奔そく一りりり入る人く初め
るも能くあひ目のおきていふもいふく入る
休る但し字及く水新おく腰掛おくあは
客も前を考へく入るく客のすくあはれ

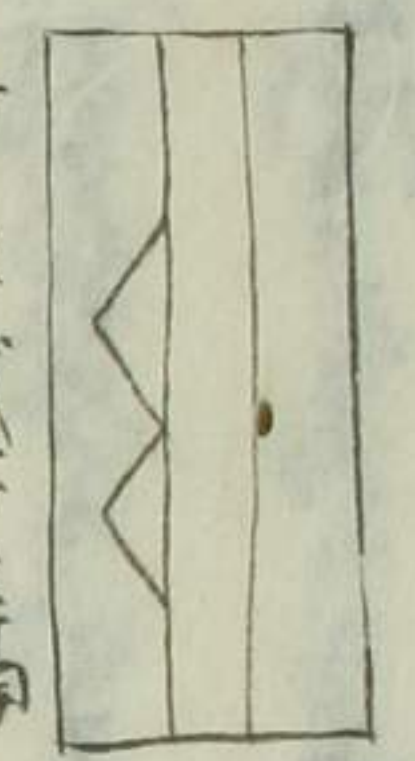
内より玄關底へ入り下へてあるきあへる入る後迎ふ
ころ其時水をくみい水入る角一息ゆへより其時
以来水師しあへるき小桶一ツの水をくみあへる
とくはるし水のたふちあへるき能くしとくはるし井水つ
いれおれ替へるき水一運ふとるきあへるき内あへる
入るへ一息ゆへ柄抄をくみゆみくあへる
ゆきとくしとくはるき曲人へくし

客来時刻肝要な事

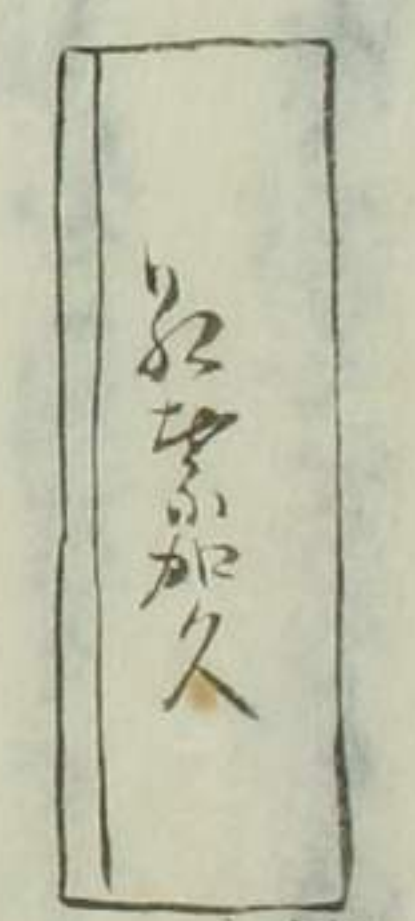
朝會を客に下火へて客を待つへ夜明へ取きとる
まへ腰掛まへとるきとるきとるきとるきとるきとるき
おの座を内壁戸杯はとるきとるきとるきとるきとるき
事向湯より客來會しとるきとるきとるきとるきとるき
中別を入るきとるきとるきとるきとるきとるきとるき
障りあへるきとるきとるきとるきとるきとるきとるき
建者あへるきとるきとるきとるきとるきとるきとるき

客將來しとるきとるきとるきとるきとるきとるきとるき

糸之香懐中一包祇湯有り 湯而る事有り 湯の時爲
之糸入蓋杯ハ扇と開き 湯上之至之其杯さりと同く



折紙紙一丁を隔
き 香合三入七包
タニ同前ナリ



折紙紙二丁
タニ同前ナリ

客腰掛待合書内ことを事 同道人相掛りさしまた
ふふて版と折紙さし可分さし 川の青めはさて
逆を待る 亭さしれし時 おふふ用れり

客多水はういふ初に 湯他々水と流ふ事 是湯
さし法式ハ 肴折紙も記ふこと 人様をすくこと
肝要とす 折紙さしさし 湯さし湯さし 湯さし湯さし
折紙さし湯さし 湯さし湯さし 湯さし湯さし

小房とふこと 客多人ふさへか 以凡二三人と書しす
世入さ入りくこと 合テさし 湯入さ 火相人得る
ふさ事 二三人まうさ 大方経 湯子他物之末故
客さ未熟ふれと 湯されり 湯されり 湯されり

分領和尙透脱云関後路通到頭即辦老趙州
又重否能本を関ふより一問をかくぬ故に一関通脱
くゆより戸内小官神とする所くおさる能く一上座
関ふ當不転和尙大慈小透脱ありしや客定
てしてとていふ所名同なり今を何し子ゆとて又
関ふをらく當城あり美法くありとす何法の関り
客定を真席に候ふ事

伝承あり神迹信實に候ふ事一より後月かあら候

大形居かりしとて一向炉内居留るに不及とて
とて振ふ依りて居かりし事もあり長き御事
とて居留るしとて候ふ

まうと客茶道にとて候ふ客にこれに勝るに大
相違とてとてお拂ひ関く客入ありこれに
居る人用炭を加ふ事一作用あり挑みきなり
略す炭は第一中し後ちめをふとてとて人の
行要之炭くより當せて茶人古法を知りす此一炭

懷席の法

小座浦の料理を一汁二菜酒かきとて一徳を
お料理たゞと不相成の旨湯を合懐席中を茶
湯同し心得上方に香斗もす是皆世間今取
交草席家地入杯々香斗中亦三ふくち不可有案
おあすさ一布三えを失ふ事一は信は事膳をかく
くくく一茶杯をさく一れものふくく一ある一
客料理懐は香斗を改め折みとてをさく一是とて

小膳をとる句一小座お貴客のあてを信はる者膳
込と膳をとる句一信はる者の信はる膳とて
くくく一とる句一信はる者の信はる膳とて
揚布又膳の信はる句一お茶うけ小膳をさす事体
信はる大方をさす事一お茶うけ小膳をさす事体
推草川草杯の信はる句一お茶うけ小膳をさす事体
すくく一信はる句一お茶うけ小膳をさす事体
信はる句一お茶うけ小膳をさす事体

中さう時大相心を用ふ事 并 墨子別有也

菓子仁は菓子と信ははるるを子と墨子見行ふ
柳をとも見也——火をうと考へ掛物と今一度え強ふ
はと聞きと命——大相を考へ出れ故火うのりとも
時をさめ内めは甲と引入る——と度——く後
——火うつりふと——いふも水はひと待て——
中さう時火うのりより火の度と——係亦火を滅
とこれ事と大なる勢をきけちかひふり大相湯ね

此水の進水と考へてあてをいふ——松凡雷
鳴く時一腹の空をふ——噴——うとさ湯あま
くふとはふなりぬ火大相と考へてさる末の事
心を用ふ——中さう客連も大相考へてこの事
ふらふさふ——夏を懐席後炭をさるゆ——中さうゆ
ぬくすれと——ま——う後中を没る事 配合の
おね矩をさる事 宜しき事

客中さうはねふの金と内掃除——一度陽ふ人へ

花入か入るふのまじりけをいふは新家の
世所花さく川骨合花せんといふれをぬき
案内に花打板に配合をいふ花を打ぬ— 禪林に短縄
小飯か之下茶小下飯を打とて— 呂故実といふは
可然小家大いふは之般年といふ用あり案内を教す
てふ本とて— 版喚鐘旦外やくもて— 問ひかへ
ぬ— 代流小名に傳へたる不可用

客も水けりい後茶入る事

案内あは火相を考へて方相といふ花入を令—
て— 小る手板— 茶を点すは用是挑略
て客をとりけり— は茶可成中かへく手板し
ふ茶を令—

客あ茶をいふ 客茶喫する法 順勝と逆勝
花おとがれ茶をいふ— 具上茶盤を金へ— 茶碗前
後へ得くはすぬ— 花は小法をりて中へ— 各
茶をいふと合へるまう— 賞客法をりて小指あり

實然の道具といふ物も其一物とて之物を色
具外にありぬ道を以て之を有るが如く茶入茶碗
袋又さき並環實然此一具あるは乞く可見亦茶入
茶碗小杯も茶抄阿る物乞くこれ命し置り
かき置る茶入茶碗上座客より度候時も同様之
主膳にもとさしわくるありまゝを明かり
かし換振しく居候まゝとしあれ是時を秘藏し
おくりともかたあふもさす勝手なり金町屋

小高り秘蔵れものゝは客と因即者等々人通具
 多ふ行くとあるを別にかけ多々入るうと文を
 是国所小道具相違ふと能く至く中かえれる
 あれ勿論なれものゝは立勝るにこそしそ
 ともかまふとふと一と命し

沈柔法

水指をこひ入るゝ水を入所改く持出着是津次り
夏月に入薄茶碗は也運びとす茶もも多川合

とくしめいふふし時茶碗底より湯と水を入すも
其次湯よくすし湯直ち茶碗に注ぐ人より接取し
まゝその湯より湯は通ふれと接取世人なへくめ
なり道奥より茶碗に注ぐ人より接取
と又不接との茶碗に注ぐ人より接取
なりし接する茶碗に注ぐ人より接取
事あり此接する茶碗に注ぐ人より接取
ふふ直ち茶碗に注ぐ人より接取

時茶碗底より湯と水を入すも
其次湯よくすし湯直ち茶碗に注ぐ人より接取し
まゝその湯より湯は通ふれと接取世人なへくめ
なり道奥より茶碗に注ぐ人より接取
と又不接との茶碗に注ぐ人より接取
なりし接する茶碗に注ぐ人より接取
事あり此接する茶碗に注ぐ人より接取
ふふ直ち茶碗に注ぐ人より接取

後く接する事

平常會

曉來人會

客より案内入事

腰掛の露地竹燈の釘金に事

石燈の沙の事

水沖の事

井華水の事

草庵の障子の事

水打板の事

近所の事

中に行燈の事

初を配合する用事

香爐の事

清浄の事

庭の事

世の曉來は傳ふ多しなみ

儒令の事

石杯かほく水きそくを——夜明をふれを考へあ
比内水打る——惣——く然云——掃除室に別家地
草菴と掃除のりく——と云々お中る事故
掃除能と云新——明る夜を考へ掃除かゝる句——
客よくも腰けり青津とてそはとふも——
迹れも灯は消え入ちういのもたき——唐燈を
ふもの物さひいありも胸をさる人あり風吹ぬ
別る新を有利客腰掛より青あはるる

よく迹よ入るむい夜中掃除はまを深氏初巻
も——ねあをれ枕掛後して月やち春竹輪
下皿等法れそく礼とこふとんこ所又ふ所と掃除
之所要と申このかち物——は丸さうしんより一寸さ
分二寸半り——とふとんこ——杯石改旦と云後
とよりくそと云はあ——次はくをりいふすへ
於の光り——掃除のり入ゆと云れは掃除に依りそ
都中入るる物を掃き——初を配合し奇心用

掛物書跡新しく大文字ありやうるなり一十年老
依り信持しく心とふまゝあり又曉合ふ掛物
事は傳あり御中改めある法に數段の曲人之後ハ
法に陽が福なり吾が出す事一時宜し信るなり
度れ自らくても待久お物故書物環とく者も限
ず法に法に一々のゆくれぬ法に飲ふ事客
あり凡物し人々は短尺破箱環とく法に飲ふあり
一室の中環の床に坐合ていふまゝに座りて見

肝要多利

右曉に六中一書分がくし能く師傳を同

不簡する

朝會 平時合曉^晩来る

火相廣く又曉に相似る

客要書これ

底に大なりぬる字は同

濡合ふ事一吾が又法飲の時宜ふあり

大相殿の方大概略の図一、勿論かゝる列あり
而して列の腹中改め掃除し、と云ふ所の下列座入を
なすは、多し掃除市よりゆゑくと云うて、大
うり、此可有不可、事、さう、うり、うり、おれ、得、と、ふ
事、さう、さう、一、さう、うり、而、さう、うり、さう、ま、お、但、す、申、此
中、列、座、入、を、一、お、れ、を、直、上、列、上、列、お、れ、大
大、さう、さう、底、を、大、さう、者、但、合、持、と、云、中、改、め、二、度、
掃除、改、め、かゝる、水、を、かゝる、と、さう、一、さう、の、さう、水

を、け、改、め、一、待、久、改、め、香、具、外、何、と、云、ゆ、く
有、れ、可、然、柄、柄、人、を、短、大、短、と、水、打、板
夕、初、入、さう、一、お、れ、一、腹、中、改、め、お、れ、取、陽、を
さう、

夜會

腰、冊、と、改、め、れ、半

さう、地、行、改、め、れ、法

石、能、さう、半

遠くも能く見ゆ

水戸の山

舟中、初夜、湯に配り合せか杯弄す

龍泉寺、燈籠、掛灯等、所り、小幡

口傳、有半、所り、能く見ゆ

酒、中、別、入、る、角、一、石、能く、能く、利、休、能く

みて、い、ま、か、か、水、戸、山、一、く、く、一、能く、能く、能く

を、三、く、く、一、能く、能く、能く、一、く、く、一、能く、能く、能く

得、遠、い、く、中、く、く、一、能く、能く、能く、一、能く、能く、能く

能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く

能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く

能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く

能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く

能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く

能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く

能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く、能く

くひす事有り風吹入ハ灯又消金あり一ふき杯も
花入及び茶碗等ては源氏様を模しゝるを用ては
小茶碗にて茶行燈を用や又掛灯を覆して用ては
師傳といふ事可法之をとりてはきつては

石時會 茶月ありくゑ事 茶うけの事

水开板 一様右道具の事

銘香板の外朝飯後茶も通り掛り茶一服茶を
事ありまじい茶を飲むも水开改めまじく茶を飲むも案

内茶會 中茶ありて内外茶碗水多ふくと打之
床是月ともふ茶碗は夏同杯ありて供ては入
炭くくぬれ茶碗はめらうぐしぬ水菓は茶
うき茶と一川合は濃茶はこひちやすべ
たふく茶碗茶碗ありて一茶碗ありて柳の
なるぬき入り入る茶 茶碗は巻く茶碗は茶
碗一又茶碗はははと茶碗ありて柳の茶碗
かきりくち 茶碗は茶碗は茶碗は茶碗は

まゝの如く切は結しむゆいたるすむ能くま
ふさくあきしと物辨るるまふ直一封とらり
と下しとありと切りと勝も持入あし下分小口と
初欠三カ小切事一傳し香爐杯と一侍遠ふあきね
御きすへ——まき茶以判——と御禮とる合座に
く懐席とすしと中き亭別とねね——なとやうく
んが又大相ふ信く座とす事あり合座入合座
加ふ——即ちこの大相と用ひく人いそする

ゆへ座より入るい客座有人同ふもの之後を配り
合水指茶盤とあり有へ——茶入を小な川ぬ湯水
のい又七物を茶入もあきと——茶碗川と——ま
んと其の二枚前文とあけ別とねね——

茶客を凡てあし付とむして入る事——名物に限る
事と底ふるまき市形寺有るもの紋と——とすもの
なり

月入會

良親之事

貴親ふたの夜舎れ事

石燈籠入事

良親ふたの月夜うらん人形を杯とす入かす
ふたより深き木陰に月夜籠るふたより知くこと
とましくとす事いふ良親ふたと信す事風維
ふ人ふたを言ふ事人ふたを言ふ事人ふたを
記合詩歌ふ信有るへ一忘るる原簿ふ杯人用てあり

雪入會

飛入あねあ地亦無雪此れ事

高かき此れ事一塵穴ふ事

石燈籠入事

高き高き何卒足跡多ふくふくぬやうふへし
飛入斗り氷ふくくけけあへし高圓杯し高き
ふく氷やふく飛入とすへりて悪あふ石燈籠
地高かきく道と信ふ杯入事し又飛入有
ること斗り高き全服ふ道と信ふ事し高き地ふたの

来りて今を惜すもいりてふれあけふはかき
露地ありて暮れしもの白く咲きつゝいふ人あり
休云蘇く今を惜別れ半く休あはれ何日か
空あふとく短人むすもくはてし短人なりて
半床ふせし事ありしとや

雨中人ありて今を惜半腰くけふ半

木履の道ありて水杯を置

あはれ入佳きから次さうかきくは是よりなれ半

はくみふりて今を惜半腰くけふ半
しと雨車ありて水杯の時不自由なり
を惜しきとありて夜雨の時燈^灯雨れからぬ
市川舟持ありて小雨の時木履のみ雨
を置てよし水杯を置しとて立りてか中
かきとありて水杯を置しとて立りてか中
まかきとありて水杯を置しとて立りてか中
半月をえりてあはれ半をえりて半月をえり

角の二つ入る金盃を両手にわたしてむすむもつり居待
たの事惣々風が北を吹くやと遠い胡弓の音と火を揺らす
音を掛くと云ふ事なり風煙の内掃障し炭を置き同
をかけ金へ―客来と火を入る―神を入る所火う
ばおやうふと云ふ事なり神を神中火さげすみ炭斗
をさし斗のふく吸入する事なり大なる火を火入持
と神より金へ―炭の火をさし―勝よりぬき金を
改めかくる金盃出―茶うければ炭火相考へて炭

二に加へる―石炭^{音カ}けに火いゝある時お極暑者ふと
を待たし―客来へ―接待は神中火を火入れし
く金盃神中茶を火入れし―風煙の炭
を金へ―客来と云ふ事なり―客を神中火の火入れ
火れ―神中火をさし―火相考へて炭
火を―金へ―炭火の火入れし

孫火の金

即ち―客来と云ふ事なり―客を神中火の火入れし

人成る事あり

法見會縁火不似く別く正実不傳

名水之會遠來之會始終御秘事多し

故実口傳・又室之會二派 初卷

至初之車不クク

世道之中除光有夫之序な伝の草之序な

又不用伝有り布竟ふ辨此草草菴書院

たり六人し不化阿多句し能く師傳と聞へし一なる

草唐体し不化之を何なるなり形の家へし伝秘草

方八寸幅を四目定法之自在撰ふ令く一人す

小至事あり令の人を教とけ又中を採用ゆの時乃

事くされとも三人ひすわくを能かまへたる才一柳が草

方んふもあし^{十カ}とて月か柳と至事一柳事々々

は信傳柳以下至柳早子集子乃類方た前後さ中

小至事本式之わしあふ出する中に信又柳かし小前

後信也事もあり故実能く熟達すへし大か小か

茶碗

茶入を茶碗に入れ中に入

薄茶入

中入

怕包

茶釜

釜入茶中二つ湯ぬい

茶杓

筒子入

小ね帚

入るくし又右に三羽外あうて

香懐中

すなわち時御茶入の香もあつた

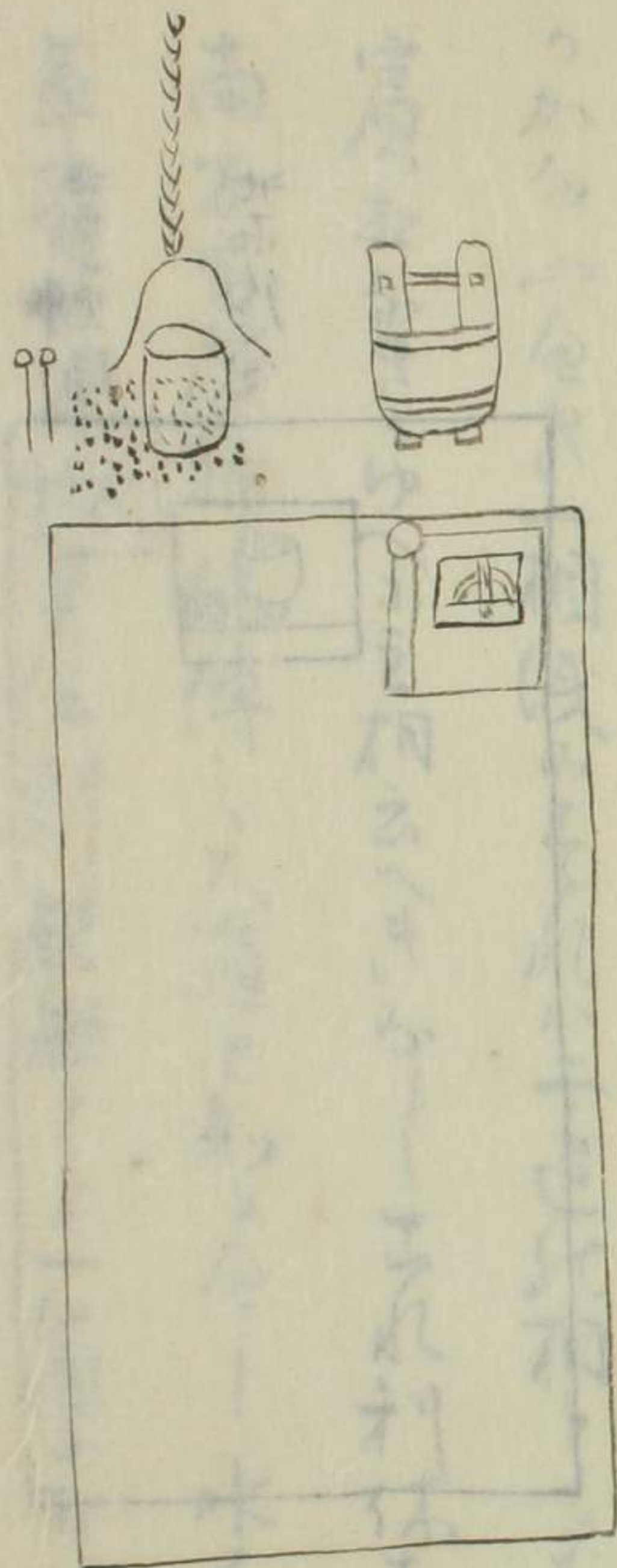
茶時

入るくし又右に三羽外あうて

別

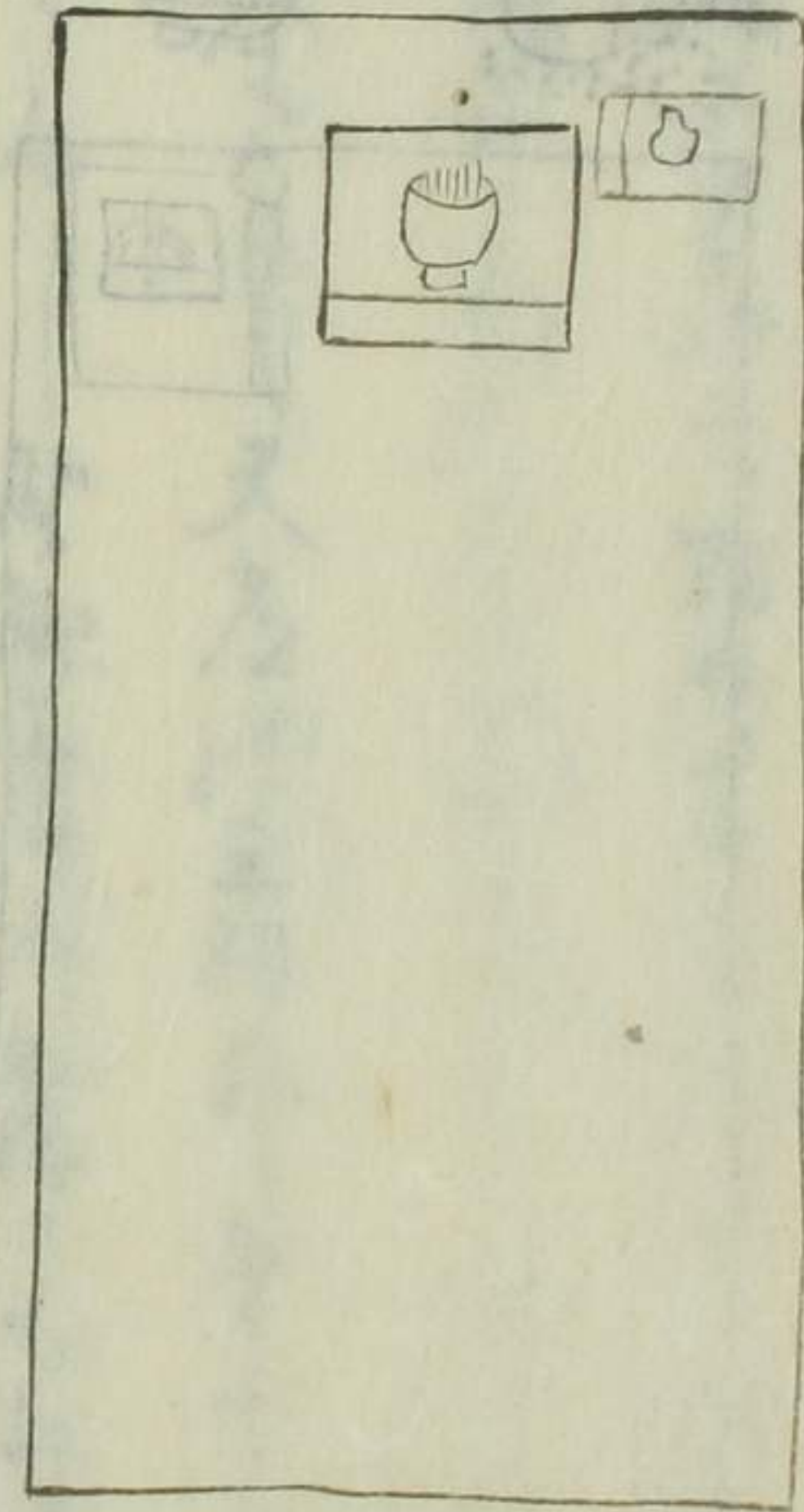
白巾用三すなわち

初座白爐と稱



大概めけ

世の火桶
世の火桶



無賓主會

賓相も主も落れ相^任に^てる白^き地^茶きい^てす
 うか^るふ^る金^も一^相紙^のを^れハ^二色^の相^もハ^紙す
 賓^のお^るま^のゆ^へハ^二主^の相^をへ^すか^るハ^二主^の利^休大^座士
 南方家啓師の傳^へる大道^と知^る金^一ハ^二水^石草^木
 草^の菴^の主^客法^具法^則規^矩と^ハ一^の圓^のハ^二破^り
 去^る金^半安^んハ^二一^の白^き地^の利

嚴^に公^の解^を自^ら筆^で本^を書^き文^を合^はす^る者^也

道桂

朱印

皇公孫自奉本亦未合云云

皇主

未く奉本亦未合云云

皇公孫自奉本亦未合云云

皇公孫自奉本亦未合云云

皇公孫自奉本亦未合云云

皇公孫自奉本亦未合云云

皇公孫自奉本亦未合云云

皇公孫自奉本亦未合云云

